

モンゴルに黒板を NGO奮闘記出版

果てしない草原の先の学校で、子どもたちが待っている。――。モンゴルの全小中学、

高校に黒板を贈っているNPO法人「モンゴルパートナーシップ研究所」(大阪市)が、活動記録をまとめた「届け黒板、モンゴルへ! NGO奮闘記」を出版した。草原を越えて一枚の黒板を届ける人たちと現地の子どもたちとの出会いの物語になっている。

モンゴルでは1990年代の民主化後の混乱で都市と地方との格差が広がり、草原地帯の学校では予算面の問題から、表面がはがれ、割れ目が入るほど傷んだ黒板が使われていた。

同研究所は2001年に設立。翌年からモンゴルに約600校ある小中学、高校に計1200枚の黒板を贈ることを目標に活動を始め、1枚分2万円の寄付を募っている。黒板には寄付した個人・団体

名のプレートがつけられ、これまで、455校に1051枚が届けられた。

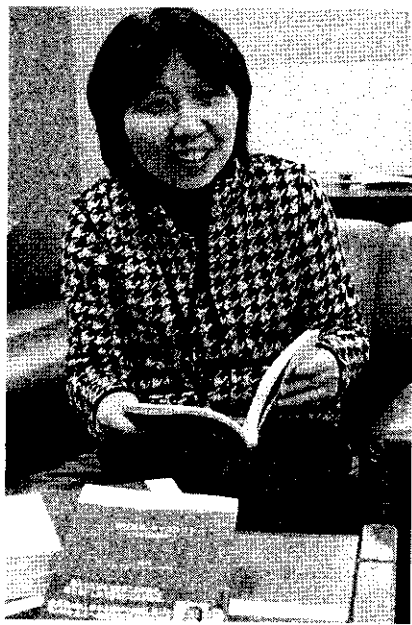
奮闘記では、首都・ウランバートルに住む研究所メンバーの日本人やモンゴル人スタッフの活動報告や、自らの善意が形になった黒板を訪ねる日本人の旅行記などで構成。黒板をめぐる現地の人たちとのやりとり、山岳地帯でのワゴン車パンクなど輸送途中でのトラブルなどが見たまま、感じたままつづられている。

現地の子どもたちとの出会いつづる

黒板を贈る、届ける気持ちを支えているのは、子どもたちとの出会いだ。黒板到着の際の心のこもったお礼のコンサート、はにかみながら「贈ってくれたのはどんな人?」「ここには来ないの?」と質問を寄せるほほえましい様子などが紹介されている。

同研究所の設立メンバーでもある国立民族学博物館教授の小長谷有紀さんは「お金や時間だけでなく、心のコストをどれだけかけたかが大切。これからも黒板を通して人と人をつないでいきたい」と話している。

A5判、197ページ、3000円(送料、税込み)。200部発行。問い合わせは同研究所(06・4395・2220)へ。



「黒板を通じて生まれた出会いの物語に触れてほしい」と話す小長谷さん